

〈研究論文〉

スウェーデン語母語話者による日本語の習得

一文法と音声にみる日本留学の効果一

永野マドセン泰子
岡本グスタフソン有花
清水 由紀子

要 旨

中級クラスに在籍するスウェーデン人学習者9人について、日本語によるプレゼンテーションを資料として文法と音声の習得を調べ、日本留学の効果を中心に分析した。その結果、文法項目では連体修飾節と条件節に、音声では発音とイントネーションの両者に留学経験の差異が顕著にあらわれた。

【キーワード】

スウェーデン語母語話者、日本語習得、複文、音声、日本留学の効果

1. はじめに

本稿の目的は、スウェーデン人母語話者による日本語学習過程において、日本への留学経験が文法や音声の習得にどのような影響を与えるか、またその評価基準として適切な文法項目は何か、さらに文法と音声の習得はどのような関係にあるのか、の3点を考察することである。海外にある日本語教育機関の多くが日本への留学をカリキュラムに取り入れているが、その効果についての具体的な分析や評価基準の報告や研究はまだ少ない。また、日本語に限らず、言語習得の研究では文法と音声がちり離して調査されることが多い。しかし文法と音声は言語の両車輪であり、第二言語としての日本語学習において両者がどのような関係にあるのか調べることは日本語教育の課題のひとつでもあろう。資料として本稿では自由プレゼンテーションを用い、文法では複文の使用を、音声では発音とイントネーションについて分析した。なお本稿では文法を主に扱い、音声分析の詳細については別稿を予定している。学習者の近年の進路の傾向として、日本での就職と進学（院）の希望が着実に増えつつあるが、その際にまず求められるのは高度なスピーチコミュニケーション能力である。その点からも、文法と音声をあわせた総合的なコ

コミュニケーション能力の分析とその評価基準を検討することの必要性が増している。

2. 資料と分析基準

2.1 学習者

スウェーデン国立・イエーテボリ大学の4学期目（2年の終わり）に在籍するスウェーデン人学習者9名を対象に調査した。このうち5名が日本留学の経験があり、1年弱の留学4名（Me, So, E, R）で半年弱の留学が1名（Sa）であった。ビデオ作成時までの日本語学習時間はおよそ490時間であった。

2.2 資料

資料は中級終了時点に近い頃、「会話」の授業の仕上げとしてビデオ録音されたものである。テーマは日本人留学生に紹介するものとし、9名の学生各自がスウェーデンの交通機関、料理、気候、観光、音楽、スポーツなど9つのテーマでプレゼンテーションを行う「スウェーデン生活マニュアル」の原稿とビデオに録音された音声を用いた。録音時間はトータルで22分であった。学習者はまずプレゼンテーション用の原稿を書き、これには一部教師の手が入っているが、原文の特徴は留めており、日本語として不自然な表現や一部助詞の間違いも混じっている。プレゼンテーション用の資料を使うことは、コントロールされたテスト法による調査でないことから、出現しなかった文型が習得されていないものなのか、偶然によるものか、あるいは話者が苦手な文型として回避したものか、テーマによるものなのか、などの判断ができないという短所があげられる。また厳密な仮定を実験検証することもできない。反面長所としては、プレゼンテーションは自国でも日本留学中でもよく使われるタスクであり、資料として集めやすいということがある。また通常、発表用の原稿を書くのでテープ起こしをする手間が省ける上、作文とスピーチという両技能の資料が得られる。今回の目的の一つはこのようなプレゼンテーション資料について、評価の指標を探ることでもある。

2.3 文法の分析基準

文法の分析基準としては原(2008)の中国語母語話者の習得で使用された分析基準に従い、複文、連体修飾節、連用修飾節の使用の広がり調べた。ただし原は縦断的習得研究であるため、使用項目の発現率の変化が主となって

いるが、本稿の対象学生は同一クラス（中級）に在籍する学生間での留学の効果が焦点であり、縦断研究ではないことから、発現数よりもその内容に重きを置いて分析した。

2.4 音声の分析基準

2.4.1 発音

発音の問題点に関しては母音の音質（「い」が「え」に聞こえるなど）、子音の音質（拗音の区別など）、母音の音量（短長の区別）、子音の音量（短長の区別）、「ら」行の音声の実現、および撥音「ん」の実現の6項目を立て、3人の教員が録音を聞いて問題のある語を記録、分類し点数化した。当初は「問題なし」「やや問題あり」「かなり問題あり」の3段階で分類したが、その後「問題なし」「問題あり」の2つに絞り、結果があまり変わらなかったことから、後者の方法を採用した。

2.4.2 イントネーション

文末イントネーションなど一部の研究を除くと、イントネーション習得に関する研究は極めて少なく、分析基準なども提唱されていない。本稿では試みとして生成音韻論に基づく東京語のイントネーションのモデル（Pierrehumbert & Beckman 1988）にみる要素を基本とし、談話機能の指標となるフォーカスの項目を加えたものを作成し、音響分析によるピッチ形の目視による分析を行った。習得されている項目に関しては得点として数えた。

3. 結果と考察（文法）

3.1 複文習得の概観

複文とは、述語が2つ以上存在する文のことで、それぞれの述語を中心としたまとまりが節である。「太郎がスウェーデンに来たのは去年の秋だった」のような文は、「太郎がスウェーデンに来た」と「...のは去年の秋だった」の2つの節に分けられ、それぞれ「来た」と「去年の秋だった」という述語を含む。原（2008）による中国語母語話者の縦断的研究によると、複文使用の割合は学習期間が長くなるにつれて増加する傾向にあるが例外もあると指摘されている。原の資料では初回の録音時が300時間の授業終了後、2回目は500時間、3回目はそれから2年後と3段階のレベルの違いが大きいので、例外もあるもののレベルが上がるにつれ規則的に増加しているのが観察され

る。しかし本稿での資料は、学習者のすべてが中級の同一クラスに在籍し、学習時間の差が少ないことから、大きな差異はもともと期待できず、今回の結果は日本留学の影響は単文、複文の出現数でひとくくりにはできないということを示唆しているといえよう。表1はスウェーデン語母語話者の資料にみる複文の割合で、最初の4人が留学経験のない学習者であるが、むしろその中に高い複文の使用率がみられる (T, Mt)。また、原にみる中級の中国人母語話者の複文使用率は2-30%台が多いが、スウェーデン人学習者のデータの平均は57%である。この違いの説明としては、今回の資料が口頭プレゼンテーションではあるものの、まず原稿を作文として書いているのに対し、原における資料は学習者同士による自由会話であったことが影響しているためと考えられる。表2に節の種類と使用数の概観を示すが、ここでも留学の有無にみられる規則的なパターンは観察されず、わずかに学習者Rによる節の使用頻度の多さが目立つだけである。これらの概観から単純に複文や節の出現率・出現数を比較することでは、留学の影響は分析できず、出現する節の種類をより詳細に検討することが必要であることが示唆された。なお、原の中国人学習者のデータでは複文が学習時間に比して増加するのに対し、連体修飾節は学習時間が増えても、なかなか使用されなかったことが報告されている。連体修飾節、連用修飾節のより詳細な考察は3.2と3.3で行う。

表1 総文数に対する複文の割合

学習者	総文数	複文数	複文の割合 (%)
Ad	15	7	47%
Ak	13	6	46%
T	18	14	78%
Mt	11	8	73%
Me	20	11	55%
Sa	17	9	55%
So	26	12	46%
E	25	13	52%
R	26	17	65%
	171	97	57%

表2 節の種類と使用数

学習者	連体	連用	合計
Ad	9	10	19
Ak	9	13	22
T	8	10	18
Mt	11	12	23
Me	9	4	13
Sa	11	9	20
So	13	7	20
E	6	7	13
R	20	20	40
	96	92	188

3.2 連体修飾節の習得

3.2.1 概観

ここでは連体修飾節を「修飾節（述語を含む形）で名詞を修飾する形式」と定義する。従って連体詞の先行する「この家」、「の」が先行する「スウェーデン人の家」などは含まない。連体修飾節は形容詞や形容動詞（以下「形容詞」に統一）あるいは動詞のみから成る1語節（赤い花、きれいな花、折れた花）から格関係を持つ複雑な節まで多様である。研究者によっては連体修飾節を「動詞・形容詞が補足成分や修飾成分を伴って名詞を修飾する」表現とし、動詞や形容詞一語による修飾は節には含めないアプローチもあるが（益岡1997:26）、本稿では言語習得の観点から、また先行研究との比較の立場から、一語節も連体修飾節として扱う。「ような」「みたいな」「名詞＋の＋ような」「名詞＋みたいな」「節＋ような」「節＋みたいな」のような連体修飾表現の場合は後者のように節を含む場合のみを連体修飾節と定義したが、「名詞（の）」が先行する例のみで、節を含む事例は今回の資料には発現しなかった。連体修飾節の下位区分として補足節、名詞修飾節、および引用節の例をあげる。また表3は連体修飾節の種類と出現数を、表4は名詞修飾節をさらに下位分類したものと出現数をそれぞれ表す。後者の分類は本稿独自のもので、原（2008）には含まれない。

①補足節（形式名詞を修飾する節）

(1) スウェーデンでオーロラが見れるのは北部だけです。

②名詞修飾節（実質名詞を修飾する節）

(2) テニスやバドミントンのできる施設が多くあります。

③引用節（「と」で引用する節）

(3) スウェーデン料理を紹介したいと思う。

表3 連体修飾節の種類と出現数

学習者	連体修飾節								計
	補足節				名詞修飾節	引用節			
	の	こと	もの	その他 (ほう、時、後)		と言う	と思う	その他	
Ad	0	2	0	0	6	1	0	0	9
Ak	0	0	0	0	6	2	1	0	9
T	0	3	0	0	2	1	2	0	8
Mt	1	0	1	2	6	0	1	0	11
Me	3	1	0	0	4	1	0	0	9
Sa	1	0	0	0	7	3	0	0	11
So	0	0	2	0	8	3	0	0	13
E	1	1	0	0	4	0	0	0	6
R	1	1	0	0	13	1	2	2	20
計	7	8	3	2	56	12	6	2	

表4 名詞修飾節の下位分類と出現数

学習者	名詞修飾 節総数	形容詞 一語節	副詞＋形容 詞一語節	より複雑な 形容詞節	その他	形容詞節 の割合
Ad	6	3	0	2	1	83%
Ak	6	4	0	0	2	67%
T	2	1	1	0	0	100%
Mt	6	4	0	2	0	100%
Me	4	2	1	1	0	100%
Sa	7	2	1	2	2	71%
So	8	0	0	0	8	0%
E	4	2	0	0	2	50%
R	13	6	1	4	2	85%
計	56	23	6	9	17	

まず最初に連体修飾節を原(2008)の中国人学習者の分析基準「補足節」「名詞修飾節」および「引用節」の三つの下位区分に分けて分類したものを、原の結果と比較する。原による中国人中級学習者のデータでは、まず補足節が使用の広がりを見せてから、名詞修飾節の使用が広がっている。これに関して原は、形式名詞「こと」や「の」が作る名詞節は主に述部と格関係を持つ補足節となるものなので、構文上なくてはならないが、名詞修飾節は体言を修飾する役割しか持たず、構文上の必要性がないためと解釈する。今回のスウェーデン人中級学習者のデータでは、全員が連体修飾節を使用しているのに対し、補足節の出現は限定的で、学習者の中には一度も使用していない者(Ak)、またグループの中でもレベルが高いと判断される学習者Rにおいても極めて限定的であった。原はまた「の」と「こと」について、全員が「こと」を使用したのに対し、「の」の使用は限定的であったと報告しているが、スウェーデン人学習者ではそのような違いはみられなかった。これらの差異が中国語とスウェーデン語という母語の違いによるものか、あるいは資料の違いによるものか、またはそれ以外の要因によるものかの判断には、さらなる調査が必要であろう。スウェーデン語は英語と同じく名詞前方型の言語であり披修飾語の名詞が関係節の前に置かれるが、中国語と日本語は共に名詞後方型である。それを考えると、中国語母語話者は正の転移により、日本語の名詞修飾節の使用が容易であると期待されるが、その出現が少ないのは意外である。以下では名詞修飾節の下位分類を試み、考察してみたい。なおすべての名詞修飾節の例文については末尾の「資料1・名詞修飾節の例」を参照されたい。

3.2.2 形容詞の先行する名詞修飾節

名詞修飾節をさらに詳細に分類して比較すると、形容詞による一語節が一人を除いて全員に使用されていた。また一語節の前部に付いて程度を表す「一番」や「ととても(とても)」の付加した形態や「スウェーデン人の一番好きな夏」のようなより複雑な節も含めると、形容詞が名詞に先行する形態が多用されていることがわかった(例文4-6)。また形容詞に先行し程度を示す語としては、「一番」が最も多く使われていた。形容詞が名詞に先行し、さらにその程度を表す語が形容詞に先行するという語順は日本語とスウェーデン語で同じである(例文7-9)、ただし(10)のような節では修飾要素の一部が後方に置かれる。以下の比較から、形容詞一語節やそれに程度を表す語

が付加したものは語順がスウェーデン語と日本語で共通であることから、母語からの正の転移が寄与するため学習が容易であり、多用されていると仮定できる。

- (4) ウィスビーは古い町だから色々な遺跡や古い建物があります。(Mt)
- (5) この公園は一番有名なスロットスコーゲンです。(Sd)
- (6) スウェーデンの一番大きい島はゴットランドで、島の一番大きい町はウィスビーです。(Mt)
- (7) en gammal park (=an old park) 「古い公園」
- (8) den äldsta parken (=the oldest park) 「一番古い公園」
- (9) en mycket gammal park (=a very old park) 「とても古い公園」
- (10) den äldsta parken i Sverige (=the oldest park in Sweden) 「スウェーデンで一番古い公園」

反面、「みんなが知っているシュールストローミング」のように動詞を用いた名詞修飾節では名詞後方型の日本語の場合は関係節が名詞に先行するが、英語と同じく名詞前方型であるスウェーデン語では名詞の後に X (that) everyone loves のように関係節として置かれる。日本語からスウェーデン語への翻訳で、スウェーデン人学習者が最も苦手とするのは、このタイプの名詞修飾節であり、今回の調査でも出現が限られることから学習者の運用においても難しい形態であることが推測される。動詞による名詞修飾節の使用は学習者をはじめ、日本留学経験のある学生に使われる傾向がある。本稿での資料はプレゼンテーション用の自由作文であることから、この形態を難しい、あるいは苦手な文型として「回避」した学生のいる可能性もある。

3.2.3 名詞修飾節と補足節の関係

名詞修飾節と補足節の関係では、一部の話者では同じタイプの文が産出され、両者の連動性がみられる。学習者 Mt による (11) と (12) は「一番+形容詞+形式名詞 (もの)」「一番+形容詞+実質名詞 (島)」という同じ構造からなっている。この話者ではまた、(13)、(14) のような動詞の先行する補足節の出現があったが、実質名詞による名詞修飾節はなかった。学習者 Me にも同様の出現傾向がみられた。この二人の学習者を見る限りでは、補足節が習得された後 (動詞による) 名詞修飾節が出現すると仮定されるが、その他の学習者では同時出現の学習者が3名あり、習得過程を特定するには至らなかった。(15)、(16) は学習者 Ad の発話から「N を (N) する」に後続する

形式名詞「こと」と実質名詞「食べ物」が連動している例をあげた。

- (11) 日本人にとって一番大切なものは、オーロラだと思います。(Mt)
- (12) スウェーデンの一番大きい島は、... (Mt)
- (13) 冬にアギスコに行った方がいいと思います。(Mt)
- (14) スウェーデンでオーロラが見れるのは、北部だけです。(Mt)
- (15) キャンプをすることも好きです。(Ad)
- (16) 夏を象徴する食べ物を食べたり、... (Ad)

3.2.4 NPAH (=Noun Phrase Accesibility Hierarchy) 「関係節化の可能性の階層」

連体修飾節の習得については世界の言語についての類型学的研究や、第二言語としての日本語における習得など幅広いアプローチがあるが、後者についてはまだ研究が少ない。ここでは斉藤（2002）で考察されている連体修飾節について普遍的といわれている仮説に基づき、今回のデータを検証する。これは言語の類型学の観点から研究された「関係節化の可能性の階層」(NPAH) (Keenan and Comrie 1977) であり、習得の難易度ではなく類型学的な調査による「関係節化され易さの序列化であり、すべての言語にあてはまる普遍的な階層」である。その序列は以下のようになる。

主語>直接目的語>間接目的語>前置詞の目的語>所有格>比較級の目的語

斉藤による第二言語習得で NPAH を検証した主な研究のまとめでは、所有格など一部の例外を除いて、対象となる第二言語、学習者の母語背景、および実験方法にかかわらず、ほとんどの研究が NPAH にほぼ沿う結果をだしている。今回得られた動詞による連体修飾節の事例では、9 人の学習者のうち 3 名には出現例がなく、残りの 6 名の使用した名詞修飾節の内訳は主格（6 名 12 例）、直接目的格（3 名 3 例）、位置格（2 名 3 例）、間接目的格（1 名 1 例）、基準格（1 名 1 例）、助格（1 名 1 例）であった。21 例という限られたデータ数ではあるが、最も多用されているのが「主格」であり次いで「直接目的格」である点は NPAH の理論に沿うものである。また日本に留学経験のある学生や、留学経験はなくてもグループ内で学習度が進んでいると判断される学生はより多種類のものを使用する傾向がみられた。以下、主な用法について例文をあげる。

- (17) 夏を象徴する食べ物 (Ad) (その食べ物が夏を象徴する) (主格)
- (18) みんなが知っているシュールストローミング (S) (シュールストローミングをみんなが知っている) (直接目的格)
- (19) スポーツをする機会 (Sa) (その機会にスポーツをする) (間接目的格)
- (20) くつろげる喫茶店 (Ak) (その喫茶店でくつろげる) (位置格「で」)
- (21) リクリスが入っているチョコ (S) (そのチョコにリクリスが入っている) (位置格「に」)
- (22) クラブやパブで買うことができる年齢 (S) (その年齢でクラブやパブで買うことができる) (基準格)
- (23) クリスマスの日までをカウントする特別なカレンダー (R) (特別なカレンダーでクリスマスの日までをカウントする) (助格)

3.2.5 補足節の使用の広がり

「こと」名詞節の使用状況

原 (2008) による中国人学習者の日本語習得では、形式名詞「こと」が広く使用されるのに対し「の」の使用は初級、中級ともに限られた学習者にとどまっていた。これに反してスウェーデン人被験者のデータでは両者に大差がみられず、出現数も限定的であった。規則性としては、「の」の使用はすべて主題としてであり、「こと」の場合は主題あるいは、目的語としての用法であった。原による中国人母語話者のデータでは①「V－たことがある」の使用が最も多く、次いで②「Nは－ことだ」、「－ことはNだ」、「－ことは－ことだ」、③番目に「－ことが好きだ・わかる」の形態が多かったと報告されている。①は「が」が後続することから形態的には主語、論理的には主格補語と考えられ、②は主題、③は目的語である。これについて原は、学習者の多くが初級教科書『みんなの日本語』で学習する文型に類似した用法をしていると考察している。反して、今回のスウェーデン人のデータでは、①の形態は出現せず、「の」の7例のすべてが主題として提示されており、いずれも主題を提示する係り助詞「は」「も」に先行していた。また「こと」の大部分も同様に主題で「は」と「も」に先行していた。しかし「こと」では、助詞「が」が後続し「－できる」などの目的語として出現している例も3例あった。日本語は Topic (主題)－comment (叙述) を基本構造としてもつ言語であるが、今回のスウェーデン人学習者による補足節の出現では、圧倒的に主題としての使用が多く、グループ内における学習レベルの差、あ

るいは日本留学の有無などの要因による差は観察されなかった。ちなみにスウェーデン語母語話者は初級では『げんき』を使用しているが、以下のような例が紹介されており、主題としては紹介されていない。

補足節「～の」の扱い

- 1) 『げんき 1』第8課 Verb のが好き／きらいです、～のが上手／下手です
目的語（対象）としてのみの扱い

補足節「～こと」の扱い

- 1) 『げんき 1』第11課～ことがあります／ありません （経験）
2) 『げんき 2』第23課～ことにする／している （決定、習慣）

文末表現の一部としてのみの扱い

以下、主な使用例をあげるが、すべての例文については末尾の「資料2・補足節の例文」を参照されたい。

「こと」

- (24) 自分が人よりできると思うことは悪いことで、(T) 主題
(25) キャンプをすることも好きです (Ad) 主題
(26) 外で長い時間遊ぶことができます (Ad) 目的語
(27) スウェーデン人は歌うことが大好きです (Me) 目的語「の」名詞節の使用状況

「の」

- (28) オーロラが見れるのは、北部だけです。(Mt) 主題
(29) 人気バンドがスウェーデンで誕生したのも偶然ではない。(Me) 主題

3.2.6 引用節の使用の広がり

原（2008）の中国人学習者の縦断的データではまず「と言う」「と思う」のような固定的な表現の短い引用節から始まり、次第に「と誘う」「と感じる」「と言われる」「って」のようにバリエーションを増やし引用節が長くなり、複文が多くなることが報告されている。スウェーデン人のデータでは、「と言う」が最も多く使われ、次いで「と思う」であり「といった」も1例みら

れた。引用節は9人の学習者のうち一人(E)を除いて全員が使用していたが、使用頻度、バリエーションともに少ない。また一貫した留学の有無による違いも観察されなかったが、留学経験があり最も複文のバリエーションがみられた学習者 So にのみ「と」による随格の使用例が出現している。以下、異なるタイプの使用例をあげる。全例文は末尾の「資料3・引用節」を参照されたい。

- (30) 真夏に「ミッドソンマルアフトン」という伝統行事があります。(Ad) 主格
- (31) その原則によると、自分が人よりできると思うことは悪いことで、つまりちょっと日本人の謙遜に似ています。(T) 主題
- (32) 「フィーカ」はスウェーデン式のおやつの時間で、普通はコーヒーを飲みながら「ブツレ」という甘いパンを食べます。(Ak) 目的格
- (33) 普通は、ミートボールはジャガイモ、リンゴンベリージャムと、グレッツドソースというグレービーソースと一緒に食べます。(So) 随格

3.3 連用修飾節の習得

連用修飾節とは修飾成分が用言(動詞・イ形容詞・ナ形容詞)や副詞を修飾する節である。ここではスウェーデン人学習者の連用修飾節の使用状況を分析する。以下は異なる連用修飾節にみる接続辞の例と、学習者9名が使用した接続辞の使用状況を一覧にしたものである(表5)。

例(時): シャワーをしたい時に、湖があります。(Ad)

例(理由): 公共交通機関で普通のお金が使えないので、特別な交通カードがある。(E)

例(逆接): 一人でフィーカができますが、普通は他の人と一緒にフィーカをします。(Ak)

例(条件): 身分証明書がなければ買えない!(So)

例(並列): 他の人と一緒にコーヒーを飲んだり、おやつを食べたりするのもフィーカです。(Ak)

例(て形): さらに、ヨーテボリには広くてきれいな公園がたくさんあります。(S)

表5 従属節の接続辞別出現数

接続辞		時		理由			逆接		条件				並列		つ	て	連用	計
学習者		とき	あと	から	ので	ため	が	でも	と	ば	たら	なら	し	たり	つ	形	中止	
Ad		0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	4	0	4	0	10
Ak		1	1	0	3	0	1	2	0	0	1	0	0	2	0	3	0	13
Mt		0	0	3	0	0	0		0	0	1	2	0	0	0	4	0	10
T		1	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	0	0	0	5	2	12
Sa		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	1	4
So		0	0	0	0	0	0		0	2	0	1	0	0	0	5	1	9
Me		0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	2	0	3	0	7
E		0	0	0	0	1	1	0	1	0	1	1	0	0	0	3	0	7
R		1	1	0	0	0	0		4	0	1	1	0	3	0	8	1	20
計		3	2	4	3	1	2	3	6	3	6	7	0	11	0	32	3	

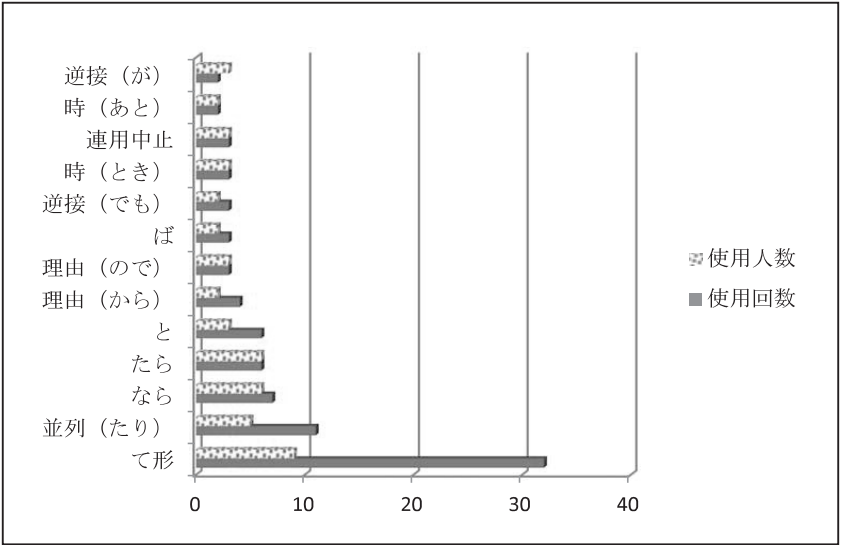


図1 従属節にみる接続辞の出現回数および使用人数

本稿のスウェーデン人のデータにみる連用修飾節の使用では、留学経験のない学習者にその多用がみられ、特に「て形」と「が」の使用が目立った。最も出現が多かったのは、「て形」で9人の学習者すべてが使用していたが、学習度や留学の有無との相関はみられず、個人差が目立った。例えば、学習者Tは「て形」を好み13回使用していたが、1-2度のみの使用が4名にみられた。使用人数と使用回数をグラフにしたものが図1である。「て形」に次いで並列の「たり」が多く出現していることから、学習者が継続や並列の形を多用していることがわかる。この結果を原（2008）による中国人母語話者の縦断的習得研究と比較すると、共通点もあるが、同時に相違点もみられる。まず共通点であるが、原では「て形」の使用が初級から中級にかけて2倍以上の出現率になることが報告されている。図1にみるスウェーデン人学習者のデータでも「て形」の多用が観察され、この形が母語背景の全く異なる学習者に共通して多用されていることがわかる。習得順序として原では「て形」「時」「理由」は初級終了時から出現し、やや遅れて「けど・が」、および「たら・ば」、さらに少し遅れて「ても」、続いて条件の「と」（ここまでは中級後半ですべて出現）、そして条件の「ば」と逆節「でも」は上級（原のデータでは中級終了から2年後）ではじめて出現している。また興味深いことに条件節の「なら」の使用例は上級になっても出現していない。一方スウェーデン人学習者では、「ば」「でも」「なら」が中級後期を対象とした今回のデータですでに出現しており、「なら」と「たり」の併用がみられる。なお条件文については次節でさらに詳しく考察する。

3.3.1 条件文の習得

「と・たら・ば・なら」などを用いた条件文の習得は第二言語としての日本語学習者にとって困難とされている項目の一つであるが、その習得に関しては先行研究が多くみられるので少し詳細に考察してみたい。ソルヴァン（2006）による異なる3つの母語（英語、中国語、韓国語）を持つ日本語学習者を対象とした「たら、ば、と」の調査では、母語背景とは無関係に「と」と「ば」における文末モダリティ制約が学習困難に関与していた。「ば」および時間的順序制約のある「たら」は、英語圏の学習者に特に困難であった。ただしソルヴァンの調査は日本で行われた調査で、被験者はすべて日本語学習歴・日本滞在歴ともに本稿の対象としたスウェーデン学習者より遥かに上級レベルであった。稲葉（1991）による英語母語話者、およびソルヴァン

(2001) によるノルウェー語母語話者の調査では共に「たら・なら」のほうが「と・ば」より習得が容易という結果がでており、これは、英語やノルウェー語には条件形式と文末モダリティ制約が存在しないため、同じように制約のない「たら・なら」の習得のほうが母語からの正の転移により容易になると説明されている。今回のスウェーデン語は英語やノルウェー語と同系統の言語であり、特にノルウェー語とは相互に意味が通じるほど似ていることから、同様の結果が出たことは納得がゆく。今回のスウェーデン人学習者のデータでは、「たら」と「なら」が6人に使われ、「ば」と「と」はそれぞれ2人（計4人）に出現していたが、そのうち3人が留学経験者である。前者は留学経験のない学生の使用が多く、反対に後者は留学経験のある学生が6人のうち5人を占めた。原（2008）の中国人のデータでは、「なら」のみが上級になっても出現していないことから、「たら」の習得が「なら」に先行するという仮説が立てられるのではないだろうか。スウェーデン人学習者による出現例のほとんどが、いつでも成りたつような一般的な条件を示す「たら・と・ば」の用法に集中し、時制も現在形のみで、条件節のバリエーションは極めて少なかった。「雨が降れば、遠足は中止です」（不確実な条件を示す仮定条件、たら、なら、ば）、「金持ちだったらヨットが買えるのに」（反実仮定の条件）、「それができたら、見せてください」（予定条件・時間的な前後関係をあらわす使用）、「外に出ると雪が降っていた」（確定条件）などの条件節の用例はなく、これらの条件節は難易度が高いことがわかる。以下例文をあげる。前例については「資料4・条件節の例文」を参照。

「なら」

(34) ウィスビーに行くなら、夏の間が一番いいです。(Mt)

(35) ヨテボリ大学の学生なら、割引になります。(Sa)

「たら」

(36) 夏が来たら、スウェーデン人は外で走りだします。(Ad)

(37) フィーカは社交の場なので、もしフィーカをしたくない人がいたら、他の人はその人を「変なやつだ」と思います。(Ak)

「ば」

(38) スウェーデンではよく「タック」という言葉を使いさえすれば、たいて

いかなり丁寧な人だと思われます。(T)

(39) ピザとケバブを混ぜれば、ケバブピザになります。(S)

「と」

(40) ちゃんと登録しないと、罰金を払わなければならないです。(E)

(41) 12月に近づいてくると、みんながクリスマスモードになります。(R)

4. 結果と考察（音声）

4.1 発音

図2のグラフは、各学習者の発話について問題のある発音を3人の教師が判断しスコア化したものである。分類基準については2.4.1を参照されたい。ここにまとめられた問題点は先行研究で報告されているスウェーデン人学習者の発音の問題点とほぼ一致するものである（永野マドセン・マークハム1998）。グラフでは、すべての発音項目で留学経験者の問題点が少なく（スコアが低い）、留学の効果が発音に顕著に表れている。特に留学効果の大きいのは、スウェーデン人学習者にとって難しい「おばさん・おばあさん」にみるような母音の長短、スウェーデン語のそれと大きく音価が異なることから問題が多いr音、そして撥音「ん」である。反面、子音の音質（拗音、破擦音など）や「さか・さっか」のような子音の長短のあるケースでは留学の効果は小さく、スウェーデン人にとって習得しにくい発音の問題であると思われる。

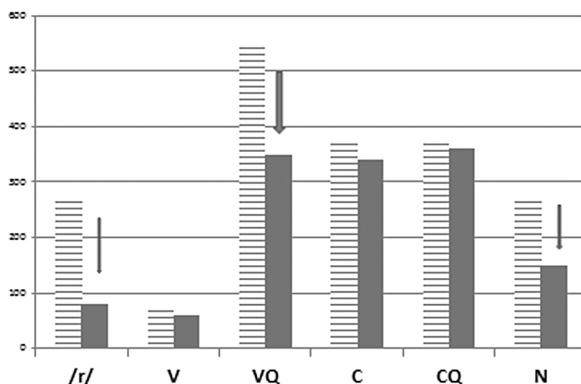


図2 問題のある音声の分類。横縞が留学未経験者。

4.2 イントネーション

図3と4にそれぞれイントネーションの習得が始まっていない学習者の発話例と、最も習得が進んでいる学習者の発話例を示す。図3の発話では、ピッチはほとんど平坦で、抑揚が全くない。このような例は日本語学習者に限らず、スウェーデン語母語話者によるアラビア語のイントネーションでも観察されている。イエーテボリ大学の日本語教師はほとんど日本語母語話者ではあるが、ピッチアクセントやイントネーションについては特別に教えてないためかとも思われる。対して、図4にみるイントネーション例では、ピッチアクセントに加えて、談話構造の特徴であるフォーカスも出現しており、習得が進んでいるが、アクセントについては平板型と下降型の区別はまだ不正確である。表6に、学習者全員のイントネーションスコアを示した。イントネーションモデル (Pierrehumbert & Beckman 1988) の項目が習得されていれば+で示されている。結果は、留学経験のある学習者がおしなべて習得が進んでおり、特に学習者7, 8, 9ではそれが顕著である。

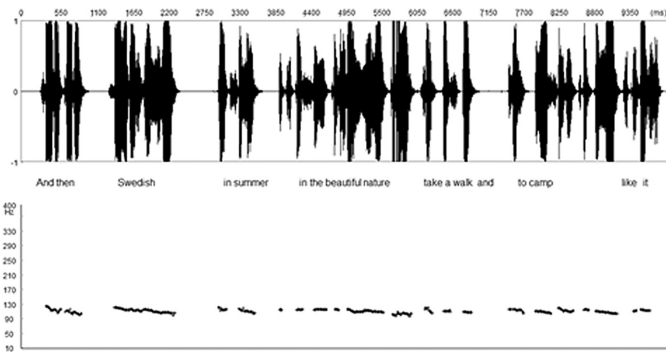


図3 イントネーションの習得が始まっていない例。

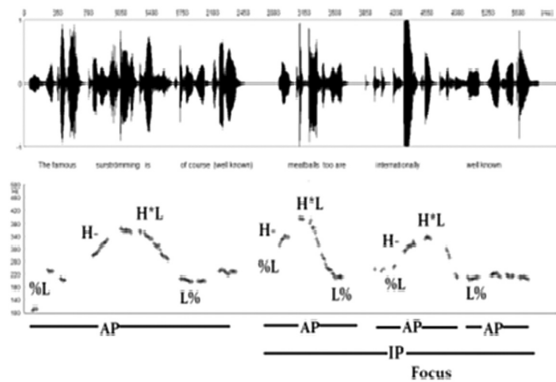


図4 イントネーションの習得が最も進んでいる学習者の発話例

表6 イントネーション項目の習得状況。

student	AP	IP	%L	H*	H*L	L%	H%	DS	SynTax	Focus
1 Ad	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2 Mc	+	+	-	-	-	+	+	-	-	-
3 T	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-
4 Ak	+	-	+	-	-	+	+	-	-	-
5 Mc	-	+	+	+	-	-	-	+	-	-
6 S	+	+	+	+	-	-	-	+		-
7 Sa	+	+	+	+	-	+	-	+	+	-
8 K	+	+	+	+	-	+	-	+	+	+
9 So	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+

4.3 音声と文法の相関関係

これまで複文の使用の広がりにもみる文法項目、発音、そしてイントネーションという三つ技能の習得状態を見てきた。このような技能の習得には留学の効果の他に、個々の学習能力が考えらるが、技能間の習得能力の相関については、あまり研究されていないようである。例えば、文法の習得と発音やイントネーションの習得は関係があるのであろうか。図5は学習者9人の発音のスコアとイントネーションのスコアを同一グラフ上で示したものである。

1 から 5 までは留学経験のある学習者で、6 から 9 までは留学経験のない学習者である。このグラフでは全体に右に長く伸びた形状がみられるが、これは学習者 1 から 5 までは、日本留学の経験者でありスコアが高いことと重なる。また発音とイントネーションのスコアのあいだにゆるやかな相関が観察される。つまり、日本留学経験者は総じて発音、イントネーション共に留学経験のない学生より習得が進んでいることを示す。発音とイントネーションの相関については、学習者 6 のイントネーションスコアが極端に低いが、この話者ではイントネーションの習得がまだ始まっていないと判断される。脳の言語機能の研究では、左半球は言語脳、右半球は感覚脳といわれ、発話、読み、書字、計算は前者が、イントネーションのような韻律は後者が司ることが知られている（門田2002）。従って、発音は言語脳で、イントネーションは感覚脳で処理されると考え、両者の習得における相関はないという仮定も成り立つが、今回の調査では相関関係がある可能性が示唆されたといえる。ただし今回の分析は学習者数が 9 人と限られており、分析項目も試験的であることから、発話とイントネーションの相関についてはより緻密な実験が必要であろう。

図 6 は発話とイントネーションに文法項目のスコアを加えたものである。ここでは文法項目の習得と発音・イントネーションの習得の間に相関関係を見出すのが難しい。また留学経験のある学習者 1 - 5 とそうでない学習者 6 - 9 の間に明確な差異も認められない。しかし、長く日本語教育に携わっている教師の経験から言えば、留学経験の有無は学生と少し話せばすぐわかる程の影響がある。また半年の留学経験と 1 年の留学経験の差も大きい。このことから、今回の文法の習得基準として使用した項目、またプレゼンテーションという形のデータが留学の効果を知る上で果たして適当であったかという疑問が残る。まず文法項目であるが、今回は複文の使用の広がりに関係する項目を使用し、それが出現していればスコアが上がるという方法を取った。しかし、学習者はまず自宅でプレゼンテーション用の作文を書いており、この段階で辞書や翻訳ソフトを使うことも可能である。またプレゼンテーションというデータは、一方的に発信するものであり、相手の発話を理解し、それに対して発信するという相互のコミュニケーション能力を測るものではない。かわりに日本人母語話者との自然な対話などをデータとして使用すれば、今回使用しなかった文法項目や、語用論的な要素がより強力な分析基準として出現する可能性も考えられる。ただし、プレゼンテーションはデータ

として取得しやすく、テキストも存在するためテープの書き起こしの手間が省けるという利点がある。今後もこのタイプのデータを使用するのであれば、連体修飾に焦点を当てるという可能性も考えられる。連体修飾は一語節も含めればかなり早い段階から習得され、またいくらでも複雑な構造に発展する。表4「名詞修飾節の下位分類と出現数」では、留学経験者には複雑なタイプ(表中の「その他」)が見られるという傾向が観察されている。

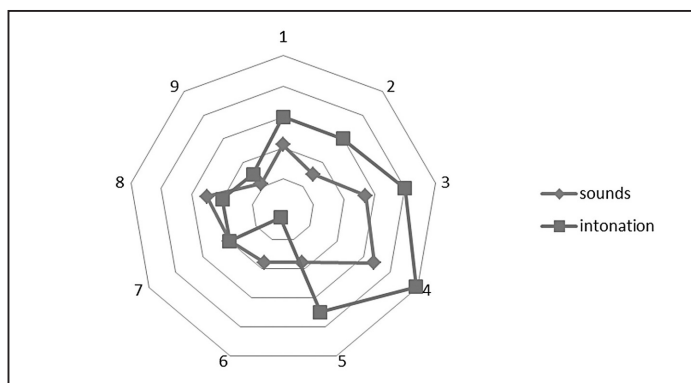


図5 発音とイントネーションの関係

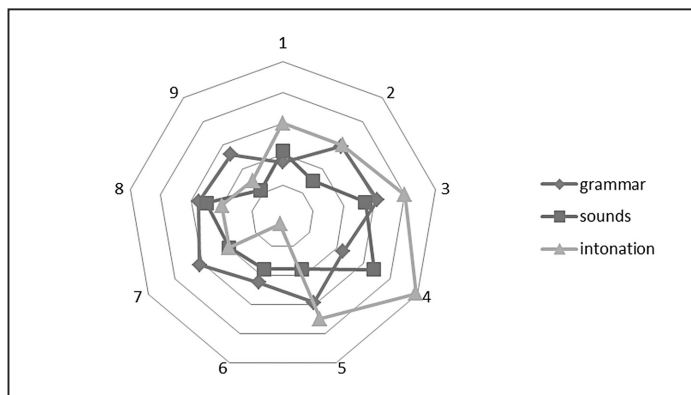


図6 発音、イントネーション、および文法の関係

5. まとめ

今回の調査では、発音とイントネーションに最も顕著な留学の効果が観察

された。また、発音やイントネーションの習得の進んでいる学生には、文法項目でもより高度なバリエーションがみられる傾向が観察された。イントネーションの習得が最も進んでいる学習者 So や R には、名詞修飾節の下位分類や条件節でより習得の困難と思われるバリエーションが出現している。また学習者間の中間言語文法は名詞修飾節によく特徴が表れていた。反面、複文にみる分析項目の出現数だけでは、留学の効果や学習度は計れなかった。今後は、日本人母語話者と学習者の自然な対話など、データの種類を増やすことにより留学の効果をより多方面から考察し、同時に分析基準についても考察を深めてゆきたい。

参考文献

- 稲葉みどり (1991) 「日本語条件文の意味領域と中間言語構造－英語話者の第2言語習得過程を中心に－」『日本語教育』 vol.75、 pp.87-99. 日本語教育学会
- 門田修平 (2002) 『英語の書きことばと話しことばはいかに関係しているか』 くろしお出版
- 斉藤浩美 (2002) 「連体修飾節の習得に関する研究の動向 (第1章 文法形式と機能の習得と使用) 』『言語文化と日本語教育. 増刊特集号, 第二言語習得・教育の研究最前線』 pp.45-69.
- ソルヴァン・ハリリー (2001) 「第二言語習得理論に関する基礎研究－ノルウェー語話者の日本語習得過程を中心に－」 広島大学大学院文学研究科言語学専攻博士論文
- ソルヴァン・ハリリー (2006) 「日本語学習者における条件文習得問題について」『条件表現の対照』 くろしお出版、 pp.173-189.
- 永野マドセン泰子・マークハム、ダンカン (1998) 「日本語発話の知覚と生成にあたる視覚メディアの影響、スウェーデン人のデータから」『日本語教育学会春季大会予行集』、 pp.171-176.
- 原やす江 (2008) 「中国語母語話者の日本語習得過程、一自由発話文に現れた複文の使用の広がり－」『城西国際大学紀要』 16(2)、 pp.13-39.
- 益岡隆司 (1997) 『新日本語文法選書2 複文』 くろしお出版
- Keenan, E. & Comrie, B. (1977) 'Noun phrase accessibility and universal grammar'. *Linguistic Inquiry*, 8:63-99.
- Pierrehumbert, J & Beckman, M.E. (1988) *Japanese tone structure*. Cambridge, MA: MIT Press.

資料1・名詞修飾節の例文

きれいな自然・古い建物・色々な遺跡・スウェーデンの一番大きい島・島で一番大きい町 (Mt)

変なやつ・伝統的なケーキ・長い時間・くつろげる喫茶店 (位置格「で」)・一番人気があるケーキ (主格)・フィーカをしたくない人 (主格) (Ak)

美しい自然・おいしい果物・伝統的なダンス・スウェーデン人の一番好きな夏・スウェーデン人のとっても好きな果物 (直接目的格)・夏を象徴する食べ物 (主格) (Ad)

丁寧な人・かなり丁寧な人・ (T)

ポピュラーな極み・大規模な会場・色々異なる点・最も簡単で便利な方法 (Me)

色々なスポーツ・きれいな公園・一番有名なスロットスコーゲン・この都市で (の) 有名なチーム・天気がいい日・スポーツをする機会 (間接目的格)・野球に似ているスポーツ (主格)・ (Sa)

一番人気がある (の) ピザ・菓子が大好きな国民 (主格)・売る場所 (位置格「で」)・持っている種類 (直接目的格)・みんなが知っているシュールストローミング (直接目的格)・日本であまりない (の) リコリス・サルトラクリス (主格)、リクリスが入っているチョコ・クラブやパブで買うことができる年齢 (基準格「で」) (So)

特別な機械・一般的な公共交通機関・ドアの近くにあるボタン (主格)・駅や停留所の近くにあるプレスビイロン (主格) (E)

小さい子供・やさしい子・素敵なクリスマス・伝統的な行事・伝統的な食べ物・特別な菓子パン・一番重要な役・スウェーデンで一番長い夜・テレビで放送される特別な番組 (主格)・クリスマスの前にある大きな行事 (主格)・クリスマスの日までをカウントする特別なカレンダー (助格「で」)・一人の選ばれた女の子 (主格)・黄色のサフランが入っている菓子パン (主格)・ (R)

資料2・補足節の例文

「こと」

しかし、とても大切なことは「ヤンテの掟」です (T) 主題

自分が人よりできると思うことは悪いことで、(T) 主題

キャンプをすることも好きです (Ad) 主題

スウェーデン人チームの試合は世界で一番大切なことです (T) 主題

それは、スウェーデン人にとって大切なことです (R) 主題

外で長い時間遊ぶことができます (Ad) 目的語

... 携帯電話や、クレジットカードで払うことができますが、... (E) 目的語

スウェーデン人は歌うことが大好きです (Me) 目的語「の」名詞節の使用状況

「の」

オーロラが見れるのは、北部だけです。(Mt) 主題

人気バンドがスウェーデンで誕生したのも偶然ではない。(Me) 主題

チケットを手にいれるのは、かなり難儀なことです。(Me) 主題

インターネットサイトで買うのは、最も簡単で便利な方法です。(Me) 主題

とくに人気なのはサッカーです。(Sa) 主題

日本ととっても違うのは、運賃の払い方です。(E) 主題

最後に紹介するのはクリスマスです (R) 主題

資料3・引用節の例文

真夏に「ミッドソンマルアフトン」という伝統行事があります。(Ad) 主語

八月の初めには、ヴィンネチルスベッカンという中世の習慣があるからです。(Mt) 主語

スウェーデンではよく「タック」という言葉を使いさえすれば、たいていかなり丁寧な人だと思われます。(T) 目的語

しかし、とても大切なことは「ヤンテの掟」と言う原則があります。(T) 主格

その原則によると、自分が人よりできると思うことは悪いことで、つまりちょっと日本人の謙遜に似ています。(T) 主題

「フィーカ」はスウェーデン式のおやつ時間で、普通はコーヒーを飲みながら「ブッレ」という甘いパンを食べます。(Ak) 目的格

フィーカは社交の場なので、もしフィーカをしたくない人がいたら、他の人はその人を「変なやつだ」と思います。(Ak) 目的語

伝説によると、300年前に、アドルフ・フレドリクという王様が、セムラを14個食べた後、すぐ死んでしまったそうです。(Ak) 主格

ストックホルムのアールソングスカンセンや、ヨーテボリのロッタボリセボリといった大衆合唱イベントは人気です。(Me) 主題

ズラタン・イブラヒモビッチというサッカー選手を知っているでしょうか。(Sa) 目的格

また、フィシーケンという体育館では、(Sa) 主題

ぜび友達とブレンボルという野球に似ているスポーツをしてみてください。(Sa) 目的格

普通は、ミートボールはジャガイモ、リンゴンベリージャムと、グレッドソースというグレービーソースと一緒に食べます。(So) 随格

資料4・条件節の例文

「なら」
オーロラが見たいと思っているなら、例えば冬にアギスコに行った方がいいと思います。(Mt)

ウィスビーに行くなら、夏の間が一番いいです。(Mt)

ヨテボリ大学の学生なら、割引になります。(Sa)

お酒が買いたいなら、身分証明書は忘れないようにしてください。(So)

インディーズのバンドなら、ネフェティティやスティックフィンガシャー、プレスタヴィークなどのクラブ、ライブハウスがいいでしょう。(Me)

ストックホルムの地下鉄なら、あります。(E)

もし家族に小さい子供がいるなら、誰かがサンタさんのふりをして、子供たちにプレゼントをあげます。(R)

「たら」
夏が来たら、スウェーデン人は外で走りだします。(Ad)

フィーカは社交の場なので、もしフィーカをしたくない人がいたら、他の人はその人を「変なやつだ」と思います。(Ak)

スウェーデンの北に行ったら、ユッカセルビのアイスホテルにも行ったほうがいいと思います。(Mt)

よくスウェーデン人は冬の間に鬱になりますが、夏が来たら、みんなうれしくなります。(T)

お金がなくなったら、チャージできます。(E)

食べ終わったら、みんなが居間に移動します。(R)

「ば」
スウェーデンではよく「タック」という言葉を使いさえすれば、たいていかなり丁寧な人だと思われます。(T)

ピザとケバブを混ぜれば、ケバブピザになります。(So)

身分証明書がなければ買えません。(So)

「と」

その原則によると、自分が人よりできると思うことは悪いことで、つまりちょっと日本人の謙遜に似ています。(T)

ちゃんと登録しないと、罰金を払わなければならないです。(E)

12月に近づいてくると、みんながクリスマスモードになります。(R)

12月に入ると、クリスマスの日までをカウントする特別なカレンダーがあります。(R)

毎日曜日になると、ろうそくに、火をともします。(R)

子供たちがドアを開けるとサンタさんが、「ここにやさしい子はいませんか」とたずねます。(R)

NAGANO-Madsen Yasuko

(スウェーデン国立イエーテボリ大学文学部言語文学学科教授)

OKAMOTO-Gustafsson Yuka

(スウェーデン国立イエーテボリ大学文学部言語文学学科専任講師)

SHIMIZU Yukiko

(スウェーデン国立イエーテボリ大学文学部言語文学学科専任講師)